ルキアーノスの『アナカルシス』における 体育論について

—— 体育思想史的研究 ——

杉本 政策*, 水野 忠文**

(昭和50年3月5日受付)

Some Thoughts Concerning Lucian's Thought of Physical Education in "Anacharsis"

Masashige SUGIMOTO (Fukui University)

Tadafumi MIZUNO (University of Tokyo)

ルキアーノス(120~190 A. D.)の『アナカルシス』を検討した結果、次の3点が明らかになった。Ⅰ. 彼は競技の目標を、(1)市民および国家の自由、(2)安寧、(3)栄誉、(4)先祖伝来の祝祭の喜び、(5)一族の繁栄といった伝統的な精神的遺産に求め、また競技者像を、(1)男らしい勇気、(2)身体美、(3)最高の身体的状態、(4)栄誉、(5)勝利への不屈の意志、(6)敢闘の精神をもったものと捉えている。したがって、これらは倫理的教育的競技観といえる。

Ⅱ. 国家防衛者の教育方法に関しては、魂の教育と体育を重視し、具体的な資質としては、(1)軽快で強靱な身体を持つこと、(2)勇気があること、(3)優秀な人間であること、の3点を挙げているので、これらはプラトーンの国家篇における防衛者の把握の仕方と類似したものといえる。Ⅲ. 競技見学に関しては、青年の魂をふるいたたせることによって、競技への動機づけになると捉えているとみられる。

以上の3点は、体育思想史的に有意義なものと考えられる。

The historical implication of Lucian's (120~190 A. D.) work, "Anacharsis" was investigated as a physical education thought. Following three points were clarified:

1. Lucian pointed out as the purposes of athletic contests (1) freedom for each individual and for the state in general, (2) wealth, (3) glory, (4) enjoyment of ancestral feast-days, (5) welfare for one's family, and as an ideal figure of contestants, (1) manly perfection, (2) physical-beauty, (3) best physical condition, (4) glory, (5) unindomitable spirit and inexpressible ardour for victory, (6) indescribable fight. His idea of contests seems to have a moralistic and educational significance.
2. His concept about the guardians of the polis attaches importance to education of the soul and building of the body, and it pointed out the following three items as the guardian's qualities, those are, (1) he has an elastic and harder body, (2) he has a courage, and (3) he is a superior man. This concept of his seems to be similar to the Plato's thoughts in his "Republic".
3. He grasped that to visit or to observe a good contest is an important factor of motivation

* 福井大学教育学部 ** 東京大学教育学部

that leads young people to the practice of athletic games.

Thus, it is felt that these three points give a new significance to the history of thoughts on physical education, because these findings have not been mentioned before.

(Masashige SUGIMOTO and Tadafumi MIZUNO: Some Thoughts Concerning Lucian's Thought of Physical Education in "Anacharsis", *Research Journal of Physical Education*, Vol. 20, No. 3, Dec., 1975, pp. 177~184.)

1. 序

帝政ローマ時代に活躍したルキアーノス (Lucianus, c. 120~190 A.D.) の作品『アナカルシス』¹⁾については、これまでに、岸野雄三の「ルキアーノスの "Anacharsis" とその歴史的意義」²⁾および「Flavios Philostratos の体操論の一考察」³⁾や E. Steindl の Lukian Leibesübungen im Alten Athen (Anacharsis)⁴⁾等の諸研究がある。このような研究は、簡潔に言えば、岸野、M. Wieland⁵⁾はローマ時代の墮落的体育状況と識者の批判とに対する体育弁護書を意図した作品であると捉え、また E. Steindl, K. G. Jakob⁶⁾は、古典ギリシャ体育への回帰を意図した作品であるとするにとどっていて⁷⁾、特に体育的あるいは体育思想史⁸⁾上の意義についての論及はないようである。そこで筆者は、この点に注目してその意義を問いたいと考え、この研究を取り上げることにした。

本論文の構成は、

- (1) ルキアーノスの時代背景と略歴および作品
- (2) 『アナカルシス』の内容の概要
- (3) 『アナカルシス』の要旨
- (4) 『アナカルシス』における体育思想史的意義の考察

とし、使用した主要テキストは、Loeb: Lucian "Anacharsis" by A. M. Harmon, London, 1953 に拠り、その際、Artemis: Lukian, Leibesübungen im Alten Athen "Anacharsis" von E. Steindl, Zürich, 1963 をも参考にした。

2. 本 論

- (1) ルキアーノスの時代背景と略歴および作品
ルキアーノスの時代は、ローマ皇帝ハドリアヌス (117~138 A.D. 在位) を含むいわゆる五賢帝

期であり、ローマが自己の帝国領を最大に拡張した時代である。しかし彼の『アナカルシス』を論究するに際しては、更に次の2点は前提されねばならない。第1点はこの時代の競技状況が、ギリシャ時代に較べプロ化傾向が濃厚であったという点できわめて墮落的⁹⁾といわれることであり、第2点、この時代が標準語 (koinē) 化したギリシャ語を排してプラトーン (Platon. 427~347 B.C.) 等の語彙、文体に関する知識を要求した。古典ギリシャへの復古主義運動の時代¹⁰⁾であった点である。一般的にこのようにいわれることが、ルキアーノスの時代背景として特色づけられる。

このような時代を背景として、彼は故国シリアのサモサタを後にし、弁辞家、作家としてローマ帝国を広く遊歴¹¹⁾しながら、『メニッポス』、『神々の対話』、『本当の話』、『アナカルシス』等の作品を著わしている。¹²⁾

なお、ここで取り上げる『アナカルシス』の正確な著作年代は不明であるが、彼がエジプトで官職について晩年の作品¹³⁾であると一般には推定されている。

(2) 『アナカルシス』の内容の概要

わが国において『アナカルシス』は、一般にはあまり知られていないので、まず、この基本的構成を概観することにする。

本書は、プラトーンの対話形式をとっている。対話の登場人物は、アテナイの立法家ソロンとスキュティアからの客人アナカルシスで、その主な語り手は、学識経験ともに豊かなソロンである。ソロンは相手役となるアナカルシスの非ギリシャ的な体育観、競技観に対して、鋭い批判力と豊かな包括力とによって、自分の体育論を展開する。その際のソロンは、ルキアーノス自身の代弁者として述べられる。

次に、本書は対話の連続であって章節の区分は

ないが、筆者が試みに内容を区分すれば、次のようになろう。すなわち、

I. 原頁 (Loeb 版の数字による) 1~17——祭典競技やその賞品等の一般的説明および国家的民族的立場からみた競技の意味。

II. 原頁 18~23——国家の構造とそれからくる必然的帰結としての市民教育。

III. 原頁 24~31——身体教育 (体育) の効用と体育の国家的目標。

IV. 原頁 32~40——以上の説明の問題点の整理、追補および若干の風習の説明の4区分となる。

(3) 『アナカルシス』の要旨

まず本書の内容を上記区分に従って要約する。

I. 原頁 1~17——ルキアーノスは、この箇所では、競技やその賞品の基礎的意味並びにそれらの国家的民族的意味を概説する。それは、競技 (*ἀγών*) について知見を持っていない、そして法治国家でない国の人々が、もしギリシャに来て、競技に没頭している青年を見たならば、おそらく彼らを完全に精神異常と診断を下すに違いないという事実を誤って把握することのおそれに対する配慮からである。

まず、競技について、この訓練は、ギムナシオンと呼ばれ、愉快で有益で、更に身体を強靱にする (原頁 6) ものである。種目としては、レスリング、パンクラチオン、ボクシング、跳躍、円盤投げを挙げる。次に競技会の賞品について、ルキアーノスは、オリュンピアでは野生のオリーブの冠、イストミア¹⁴⁾では松の冠、ネメアではオランダみつばの冠、ピュティアではアポロンに供されたリンゴであった (原頁 9) という。けれども葉冠は、ギリシャ人でない人達には理解できないところがある。葉冠に内包される意味は、個人の名誉の象徴という一面 (原頁 10) と、他面国家的民族的な自由・安寧、名誉、一族の安泰等の伝統的意味があり、この2面を理解する必要があると彼は考える (原頁 15)。

けれども、上述した「訓練」→「競技」→「賞品」の関係は、ごく少数の選ばれた人のものに限られるから、国家全体からみると教育上偏りが生ずる。そこでルキアーノスは、訓練の目標を、「善」 (*ἀγαθόν*) に置くのである (原頁 15)。この

点は、以下順次述べる体育の国家的意義にかかわるので留意しておく必要がある。

原頁 18~23——この箇所からルキアーノスは彼の教育 (*παιδεία*) についての考えを述べるのである。ここおよび次の原頁 31 までは、本書の骨子となる部分であり注目しなければならないところと思う。ここではまず国家 (*πόλις*) とは何かという点から説き始められる。国家とは、城壁とか神殿とか造船所などの建物ではない、国家の全体的な意義は市民にある。その理由は、一切のことを計画し、実行するのは市民であり、国家の安全を護持するのも市民に他ならぬからである。従って、彼は、この国家では市民が魂に善さ (*ἀρετή*) を、身体に強さ (*ἰσχύς*) を持つことが大切なことだといっているのである (原頁 20)。まず養育である。これは自由な教育で導くために母親とか保母とか家庭教師に一任される。次が少年の教育となるが、ここでは、彼らの魂を音楽と算術の炎で燦る。次に文章を書くことや軽快に読むことを教え、進歩がみられたならば、脳裏深く記憶されるように、韻律で飾った賢者の言葉や古い時代の勲功や有益な物語 (ヘロドトスやホメーロス) を朗読してやる (原頁 21)。最後は青年、成人のための教育である。それは第1に国法の暗記を挙げる。次いで市民のあるべき態度を修得するためにソピストや哲学者との対話を挙げ、更に歌唱やフルート吹奏を伴う悲劇や喜劇の鑑賞を続ける。これは美德や悪徳を見分ける目を養うために必要なものである (原頁 22~23)。内容的にルキアーノスは、魂の教育を以上のように考えている。

原頁 24~31——さて、次がルキアーノスの体育論である。少年期に入ると、まずは気候に慣れさせる。これはあらゆる時に役立つものであるからだ。次は油での摩擦である。これでしなやかで柔軟な皮膚をつくる (原頁 24)。格技を教授するのは、第1に、危険に直面した時、勇敢に闘えるようにするためであり、第2に、その結果、身体は病気にかかりにくくなり、更により強靱になるからである (原頁 25)。しかし第2の効果を生じさせるものは格技のみではない。短・長距離走、跳躍、槍投げ、円盤投げも同様であり、それぞれ今日の持久力、スピード、筋力等に当たるものに貢献す

る(原頁27)。また粉末(κόνες)の効用は、汗と油で皮膚がすべり易くなった選手を掴まえる時、あるいはそれから逃れようとする時、それだけ大きな体力と筋力が必要なのでそれをつけるのに貢献するからである。こうした運動(κίνησις)や訓練(ἀσκήσεις)の結果、青年はやつれているのでも、筋肉が満ち溢れる程遅しくもないが、均斉(συμμετρικα)のとれた身体に育成されるとルキアーノスは捉えている。

では以上の身心の教育によって、十分に修練された人材をなぜ必要とするのか、これが次の課題となる。ルキアーノスは、国家の頑丈な防衛者(φύλαξ)となることを期待するから青年を訓練するのであるが、そのみではなく、青年を平和な時期でも、立派な態度で公共の善(κοινόν ἀγαθόν)を追求する市民にするためでもあると考える。すなわち、彼は、公共の善や国家の幸福は、公正な目標のために青年達が平和と戦争に対して、最も効果的に準備された時に達成されるものである(原頁30)と結論する。

原頁32~40——以下は、以上の内容の追補的色彩が濃い。武器使用の訓練をしないことについては、ルキアーノスは武器は準備されてありさえすればよく、あえて使用訓練をしなくても、青年を運動で訓練しておけば、それでより一層効果があるものだという考えに立っていることを示している(原頁34)。また競技による活力消耗について

は、ヒドラ(8頭の蛇)の伝説を駆使して、人は身体を鍛練すればする程、活力は蓄えられると説く(原頁35)。ルキアーノスは、以下の事柄についても、次の考え方を提示する。競技会を観戦させるのは、優秀な競技態度を見たり、優れた成績を残した人々の名前が公表され、称賛されるのを見たりしたら、青年達の競技に対する熱意がより増大するからであり、勝者に質素な葉冠しか与えないのは、先に述べたように、葉冠が名誉の象徴を意味しているからである。また、闘鶏やウズラの闘いを見物する風習は、市民を鶏やウズラより卑劣で臆病にみえないようにする教材として意味があるからである(原頁37)というのである。

最後に、ルキアーノスは、賞賛はしないが、市民および国家を強力にする制度や風習として、リュクルゴスの制度や風習、たとえば、水溜りでの格闘や神殿前での体罰等を紹介して『アナカルシス』を終わるのである(原頁38)。

以上の内容を教育の目的、教科の種類、教材等に区分して、それを整理してまとめると下表の通りとなる。

(4) 『アナカルシス』における体育思想史的意義の考察

(i) ルキアーノスの競技(ἀγών)観

ルキアーノスの競技観を体育思想史的に解明するに当たって、ここでは便宜上、競技を、(A)その目標、(B)競技者の資質、(C)競技者の身体像の3点に

『アナカルシス』における教育の内容

教育の目的	教科	教材
教育 善を志向する、将来ポリスの平和と幸福を維持、発展さすに相応しい人材の育成(原頁30)	体育	運動競技(κίνησις) 油、粉末、粘土床を用いたレスリング、パンクラチオン、その他ギリシャ特有の用具を用いたボクシング、槍投げ、円盤投げ、幅跳、短距離走、長距離走。 自然の利用 太陽光線および四季の変化に耐える訓練。(原頁1~8, 16, 27~29)
	魂の教育	広義の音楽 「養育」——自由な教育 「初等教育」——音楽、算術、読み書き、古典の朗読 「青年、成人教育」——悲劇、喜劇の観劇、フルート吹奏、合唱、闘鶏・ウズラの見学、祭典競技の見学、哲学者やソピストの会話、憲法の暗記。(原頁18~23, 27)

分けて考察したい。

(A) 競技の目標——葉冠の意味——競技をするのは、いうまでもなく、勝者となって賞品を獲得することにある。従って、賞品、特に葉冠が内包している意味をまず問題にしなければならない。この賞品に関して、ルキアーノスは、結論的には国家的観点からみた歴史的民族的意味に集約するのであるが、その前に、個人心理的な側面から次のように述べている箇所に注目しなければならない。

「我々は外面的価値で、決して賞品を判断してはならない。賞品は単なる勝利のシンボル、勝利者の印にすぎない。しかしそれに伴う名誉(δόξα)は、勝利者にとってきわめて貴重なものである。」(原頁10)。

すなわち、競技は、個人心理的には、物質的な賞品を獲得するためにするものではなく、精神的な名誉を得るために競技をすることが、ここでは理解できよう。次に、これを包括した(原頁17)歴史的民族的意味の競技目標について、彼は次のように説いている。

「……すべての善き市民に共通に開いている競技会がある。その競技会の葉冠は、松やオリーブやオランダみつばで作ったものではなく、あらゆる人間的な幸福そのものの中に含まれている。つまり、市民1人1人の自由と国家の自由、安寧、栄誉、先祖伝来の祝祭の喜び、一族の繁栄……これらのすべてのことが、葉冠に織り込まれており、それらは運動や訓練を導く競技から生ずるのである。」(原頁15)

このようにルキアーノスは、国家的にみた競技の目標を、(1)市民および国家の自由、(2)安寧、(3)栄誉、(4)先祖伝来の祝祭の喜び、(5)一族の繁栄の意味を内包する葉冠に求めている。このような個人的にも国家的にも、物質的報酬ではない、いわば無形の歴史的民族的な精神的なものを包蔵する葉冠を競技目標とする捉え方は、いわゆる物質主義を離れてきわめて倫理的性格の強い競技観であるといえよう。

(B) 競技者の資質——次に競技者の資質をみることにする。彼は次のように説いている。

「もし、オリュンピア祭やイストミア祭やネ

メア祭の時ならば、私が君にそこでの興奮を話すだけでは、あたかも君自身が大観衆の真中に座って、勝利を求める男らしい勇気や身体美、驚嘆すべき身体の状態、名誉心、勝利への不屈の意志、名状しがたい奮闘をみたかのように、充分に納得させることはできないであろう。」(原頁12)

以上、競技者の資質とみられるものは次のようになる。

- (1) 勝利を求める男らしい勇気を持つこと。
- (2) 身体美を有すること。
- (3) 驚嘆すべき身体の状態にあること。
- (4) 名誉心を重んずること。
- (5) 勝利への不屈の意志を持つこと。
- (6) 名状しがたい奮闘をすること。

ルキアーノスの描出したこの6点からなる競技者像は、当時の墮落的競技状況下にあったと通常指摘される帝政ローマ時代の競技者に対する強烈な批判の上に描かれていたことが充分にうかがわれる点、興味深いが、またこの6点の資質は、今日のいわゆるスポーツマンの持つべき資質としても決して奇異な感じを与えるものではなく、むしろ今日においてもなお精彩を放つものであると思われよう。換言すれば、今日の通説である「身体活動を通しての人格形成」¹⁵⁾という体育の理念に一脈相通するという意味で、教育的内容を有したものであったといえる。こうした競技者の資質が2世紀にすでにルキアーノスによって明示されていたことは、注目すべきことであろう。

(C) 競技者の身体像——上述の(A)の(2)～(3)でもみられたが、更にその身体像について彼の見解を深めてみると、原頁25で次のように述べている。

「アテナイの青年達は、太陽に黒く焼かれた健康的な皮膚の色と男らしい顔貌を誇っている。つまり大きな活力と炎と勇気を示しているのだ。……また彼らの身体はやつれている訳でも、筋肉が満ち溢れるほど逞しくもないが、均斉がとれている(συμμετρέω)。」

こうした均斉がとれているという捉え方には、ポリクレイトス(Polikleitos、前5世紀)の人体比例説¹⁶⁾的考え方の影響がみられるが、この点は、同じく彼の作品「舞踊について」や、彼とほぼ同

時代人であるフィロストラトス (F. Philostratos, 170 ~ 244/49, A. D.) の「体育について」の中にもみられるものである。前者では、

「立派な舞踊家の身体は、ポリクレイトスのカノンに相応するものであった。その体格は、正しい標準を越えて高すぎたり、長すぎたりしてはいけな、また低かったり、矮小であってもだめである。正確な比例を持たなければいけない」¹⁷⁾

と述べられ、後者では、

「身体各部の性質に関しては、彫刻の場合と同様、次の点を考慮すべきである。……体全体の中心である頭は、他の部分と正しい比例を成してなくてはならない」¹⁸⁾と述べられている。

こうしてみると、この2人の身体像の捉え方を通じて、A. D. 2世紀頃の理想とされた競技者の身体像がほぼ推察できるのではないかと思う。

以上、筆者は(A)目標、(B)資質、(C)身体像の点に主な視点をあて、ルキアーノスの競技観を考察してきたが、その結果、彼は競技を倫理的教育的に抱擁していることが明らかになったと思う。こうした競技観が、末期的競技状況¹⁹⁾といわれる帝政ローマ期に、ルキアーノスによって叙述されていた事実は、体育思想史的にみて、意義あるものといえると思う。

(ii) 国家防衛者に関する『アナカルシス』とプラトーンの「国家篇」の類似性

次に、本書とプラトーンとの国家防衛者の育成方法、資質に関する所論における類似性を考察したい。

そこで、まずルキアーノスがどのように体育を国家に位置づけているかから考察する。彼は上述の内容の要旨(原頁18~23)で指摘したように、国家を単なる建造物としてではなく、その中で一切の事柄を計画、実行して、国家の善と幸福を実現しようとする市民をもって国家と考える。この国家の構造とその志向からくる必然的帰結が、次の一節となる。

「我々は、とりわけ何よりも市民に対して、彼らが魂に善さと、身体に強さを持つことを努めて確実にしようとするものだ。」(原頁20)そして、その育成方法として内容の要約で示し

たように(表参照)魂の教育(ψυχῆς μαθήματα)と体育(γυμνασία)を重視するのである。

これに対して、プラトーンは国家篇において、国家防衛者の必要性和、その養成のための教育方法として広義の音楽(μουσική)(文育)と、体育(γυμναστική)を配しており、²⁰⁾ その両者の適正実施によって所要の特性を養い得るとしたのであるから、ここにまず第1に国家防衛者育成方法上の類似性を見いだすことができると考える。

次に、防衛者の資質に関してルキアーノスは次のように述べる。

「我々は、アテナイの青年が国家の頑丈な防衛者となることを期待しているから訓練するのだ。敵が攻撃してきてわが同胞に恐怖の念を起させても、敵を撃退する青年がいるから、我々は平和に生活できるのだ」(原頁30)

と言って防衛者の存在を肯定し、そのような国家防衛者がいかなる資質を具備するのが望ましいかという点に関して、

「より健康に、より強力、軽快にし、更に裸で訓練することでしなやかな身体を作り上げ、同時に敵にとって、最大の敵となるように育成し、その結果、教育されて最優秀な人材になった人達を我々は期待するのだ」(原頁24)

と言うのである。そこで、この引用文から防衛者²¹⁾の資質とみられる点を上げると、(1)健康で軽快でより強力な身体を持っていること、(2)敵を恐れさせる勇気があること、(3)優秀な人物であること、の3点となろう。

これに対してプラトーンは、国家防衛者の資質を、(1)愛知的であること、(2)気力があること、(3)敏速で強力であること、²²⁾としている。従って、両者の間には、特にプラトーンの(2)(3)とルキアーノスの(2)(1)は相応の類似が認められ、またプラトーンの(1)とルキアーノスの(3)はある程度の類似が認められるであろう。

第3に、用語の点についてみると、ルキアーノスは、ψυχῆς μαθήματα, γυμνασία といい、プラトーンは μουσική, γυμναστική といっているので両者の間には文字の表現上の相違は認められるものの、意味する内容においては、ほぼ同じことを表わしているものとみられるのである。

以上述べたところは、もちろんプラトーンの思想体系の全般にわたるものではないが、少なくとも上記の6点に関しては、両人の考え方かなりの類似があるものといえると思う。この両者の類似については、本論の(1)で触れたが、ルキアーノス活躍した時期、すなわちプラトーンの対話を復活のさせようと企図していた、ハドリアヌスを含む五賢帝期のアッティカ主義的潮流を持った時代背景と、誰よりもプラトーンの対話の完成に力を注いだ²³⁾と伝えられるルキアーノス自身の学問的態度とを考え合わせて理解することが適当であると考えられる。

そして、この「類似」ということについては、ギリシャ的発想の流れが時代とともに変様しつつも、なお存続していたことは認められるとしても、プラトーンの見解が一旦否定され、その後に再びプラトーンないしギリシャ体育思想へもどったとする「回帰」の存在を強く主張するためには、プラトーンの体育思想の広さと深さに比較すればルキアーノスのそれはなお「部分的類似」の存在を認めるとするにとどめるべきと考える。こうしたプラトーンとの類似のあることについては、これまでほとんど注目されていなかった点であり、従ってこれは体育思想史的にみて意義のあることといえるであろう。

(iii) 動機づけとしての競技見学

本書における体育思想史的意義は、上述で明らかにしてきた点にとどまらない。『アナカルシス』に内包されている興味ある特徴の1つとして次の点も挙げられよう。それは彼が善き競技を見学することの有意義性を認めていたとみられることである。それは(1)でみた6点を具備した理想的競技者が、歴史的民族的意味を荷なった素朴な葉冠のために技能を競い、勝利して同時代の最高の人として英雄視される(原頁36)ような競技会を見ることである。そしてそれを見て、観衆は感動をおぼえるに違いない。そこで彼はいう。

「訓練にはもう十分に耐えられる若い多くの観衆は、男らしさと厳しい活動に熱狂して、競技場を去って行くのだ。」(原頁39)

また、次のようにも述べている。

「競技で優れた成績を残した人達の名前が、

多数のギリシャ人の前で称賛され、厳かに公表されるのを青年達が見たならば、運動競技に対する熱意がより増大すると私は信ずる。」(原頁36)

ここでは競技見学で青年の魂をゆさ振り、やる気を起こさせる、つまり、彼は競技見学を競技実践への動機づけとして捉えているとみられると思う。

このような見学行為の把握の仕方は、競技への動機づけとしての意味とは直接には関係のない例であるが、同じく彼の作品『舞踊について』の中でもみることができる。すなわち、

「ヘロドトスは、耳で聴いたことより、目で見ただけの方が確実であると言ったが、舞踊 *δρῶντες* はあまりに魅力的なので、愛好者は劇場に入ると、愛の魅惑的影響のすべてを見て、正しい心に引きもどされる。……そして前よりずっと軽い気分になって劇場を去る。」²⁴⁾とそして舞踊を見た人は、誰でもそこで演ぜられたことを忠実に真似る²⁵⁾のだ、と彼はいう。

以上のようにみえてくると、ルキアーノスは、公職に就いた晩年の思想の一環として、見る行為を実践への動機づけになるものと認めるという点で教育的立場から肯定する態度をとったと推察できると思う。参加して能力を競うもの (*agōn*) ではなく、見物して遊ぶもの (*ludi*) が支持されていたと通常いわれるローマ時代²⁶⁾に、ルキアーノスがその時代的特徴である見学行為を、競技への動機づけとして、教育的に把握していたとみられる点は、ギリシャ時代にみられたクセノファネスやエウリピデス、更にプラトーンらの競技批判(彼らはみな、いわゆる競技に対し否定的態度を示していた)²⁷⁾と対比すれば、体育思想史上有意義な着想を示していると思う。そしてこれはまた同時に、今日においても、スポーツを見ることを全く無意味とする考えを再吟味してみる価値があるものといえよう。

3. む す び

以上、筆者は、ルキアーノスの『アナカルシス』における体育思想を3点から考察してきたが、その結果次の点が明らかになった。

(1) ルキアーノスの競技観は、倫理的教育内容を持ったものである。

(2) 『アナカルシス』における国家防衛者の着想は、プラトーンの「国家篇」における国家防衛者教育思想との間にいくつかの点で類似が認められる。

(3) 善き競技を見学することは、競技実践への動機づけの要因になるとみている。

この3点は、従来の体育史的研究では、指摘されなかったところであり、体育思想史の視点からみれば十分意義あるものと考えらる。

文 献

- 1) 文学の領域では、高津春繁、呉茂一らの「ルキアーノス著作集」, 「ルキアーノス短篇集」等が出版されているが、『アナカルシス』は訳出されておらず、また言及されていない。
- 2) 日本体育学会第5回大会抄録, p. 10, 1955.
- 3) 東京教育大学体育学部紀要, 第一巻, p. 27, 1961.
- 4) Artemis 版, p. 10, 1963.
- 5) M. Wieland: Hirth, Das Gesamte Turnwesen, 1893.
- 6) K. G. Jacob: Charakteristik Lukian, 1832.
- 7) これらの他に、メニッポス風作品と解するものとして、A. Harmon: Lucian "Anacharsis" 1953 や Wilhelm: Leibesübungen und Körpererziehung, 1935等の研究が数えられる。
- 8) 水野忠文: 歴史的「体育科学事典」, 第一法規, pp. 21~27, 1970.
- 9) 村川堅太郎: 「オリンピア」, 中央公論社, p. 206, 1963.
- 10) ウォール・バンクス: 「ローマ帝国衰亡史」, 吉村忠典訳, 岩波書店, pp. 31~34, 1971.
- 11) ルキアーノスの経歴を知るについては、彼の「夢」という作品以外に資料はない。
- 12) Der kleine Pauly: Lexikon der Antike, A. Druckenmüller, 3巻, Stuttgart pp. 772~777, 1968.
- 13) E. Steindl: ibid., p. 5.
- 14) Artemis 版ではデルフィ祭となっているが、本論文では Loeb に従った。
- 15) 加藤橘夫: 「保健体育学講座」日本体育学会編, 杏林書院, p. 420, 1963.
- 16) ポリクレイトスは人体各部の比例の原理が人体美の基調として重要な要素と考え、その合理的な法則性を追究したが、その比例の法則がカノンと呼ばれ、彼の代表作ドリフォロスに具現されている。
- 17) Lucian: "The Dance" Loeb. V. A. Harmon. p. 78~79, London, 1953.
- 18) Philostratos: Für Gymnastik, Jüthner Paragraph 25, Amsterdam, 1965.
- 19) 村川堅太郎: 前掲書, p. 206.
- 20) 水野忠文: 「体育思想史序説」, 世界書院, p. 45, 1968.
- 21) ここでは、「魂の教育」と「体育」とを受けた国家の求める理想的人間だと解すべきであると考えらる。だからルキアーノスは(原頁24)でソロンをして「期待する」といったものであると解する。
- 22) プラトーン: 「国家」山本光雄訳, 世界の大思想, 河出書房, 2巻, p. 17, p. 367, 1968.
- 23) E. Steindl: Lukian, Das Hohelied der Freundschaft Artemis, p. 3, Zürich, 1962.
- 24) 25) Lucian: ibid., p. 278.
- 26) 村川堅太郎: 前掲書, p. 201.
- 27) 水野忠文: 「体育史概説」, 体育の科学社, pp. 49~51, 1966.